



# メキシコの対米食料貿易の現状と問題点

国際貿易投資研究所 客員研究員 内多 允

2018年9月

一般財団法人 **国際貿易投資研究所(ITI)**  
INSTITUTE FOR INTERNATIONAL TRADE AND INVESTMENT

## 目 次

はじめに .....	1
1. 米国農務省の食料貿易統計からみた輸出入構造 .....	1
2. 米国におけるメキシコ産野菜と果物 .....	4
3. メキシコにおける米国製加工食品の市場支配の実態 .....	7
4. メキシコにおける穀物の輸入依存状況 .....	8
5. メキシコのトウモロコシ事情 .....	10
6. 飼料の主役は黄粒コーン .....	14
7. 食肉消費増加に不可欠な輸入 .....	16
a) 牛肉と生体牛の輸出が好調 .....	16
b) 旺盛な豚肉消費 .....	18
c) 高付加価値化が求められ鶏肉産業 .....	19
8. 食料資源の供給源を拡大するメキシコ .....	20
a) ガイアナ米を初めて輸入 .....	21
b) アルゼンチン小麦を初めて輸入 .....	21
c) 急増したブラジルからの輸入 .....	22
9. メキシコの NAFTA 外交と食料貿易への影響 .....	23
おわりに .....	25

# メキシコの対米食料貿易の現状と問題点

内多 允 Uchida Makoto

(一財) 国際貿易投資研究所 客員研究員

## はじめに

メキシコ・米国貿易は、1994年に発効した NAFTA（北米自由貿易協定）によって発展を遂げてきた。メキシコの最大の貿易パートナーは米国である。メキシコの食料貿易（主に農産物や加工商品）も対米輸出によって、黒字を実現した。また、メキシコの輸入依存が高い基礎食料農産物（小麦等の食料穀物、飼料作物）や食肉については、対米輸入に依存している。米国はメキシコの輸入依存度が高い部門では、強い競争力を維持してきた。

このような、貿易構造を揺るがす事態が生まれている。それはトランプ米国大統領が NAFTA 再交渉を強硬に主張していることである。メキシコとしても、過度な対米依存のリスクを痛感している筈である。トランプ政権発足前から、メキシコは各国と自由貿易協定（FTA）のネットワーク構築に取り組んできた。対米輸入依存度の高い農産物の供給源も、各国からの輸入を拡大する方針である。メキシコは農産物輸入についても、輸入相手国の拡大策を、対米外交カードに活用しているのではと思われる節もうかがえる。

本稿ではメキシコ・米国間の食料貿易の現状と、メキシコにおける関連政策の現状を取り上げる。

## 1. 米国農務省の食料貿易統計からみた輸出入構造

米国の対メキシコ食料貿易統計（2017年、米国農務省発表）によれば、輸出 186.1 億ドル、輸入 245.6 億ドルでその収支は 59.5 億ドルの入超である。同入超額は前年比 16.2% 増加した。このメキシコ向け輸出は、同輸出総額（1,384 億ドル）の 13.5% を占め、仕向国別順位は 3 位である。一方、米国の食料輸入総額（1,210.1 億ドル）の内、20.3%（245.7 億ドル）が、対メキシコ輸入で占められた（表 1）。メキシコが米国にとって、最大の食料供給国である。米国の食料貿易統計では、その内訳を穀物（小麦、トウモロコシ、大豆等）と中間財（穀物以外の農作物、畜産物等）、消費財（加工食品、飲料等の製造品）に分類して

いる。2017年の統計では、消費財が米国の対メキシコ食料輸出入の最大部門となっている（表2）。

表1 米国の農産物貿易（2017年）（単位：億ドル %）

	輸出				輸入			
	対世界		対メキシコ		対世界		対メキシコ	
	金額	シェア	金額	シェア	金額	シェア	金額	シェア
農作物	482.4	100.0	62.0	12.9	143.3	100.0	6.9	4.8
中間財	256.8	100.0	40.7	15.8	237.7	100.0	16.1	6.8
消費財	644.9	100.0	83.4	12.9	829.1	100.0	222.6	26.8
合計	1,384.0	100.0	186.2	13.5	1,210.1	100.0	245.7	20.3

（出所）米国農務省

表2 米国の対メキシコ食料貿易収支（2017年）（単位：億ドル、%）

	穀物		中間財		消費財		合計	
	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比	金額	構成比
輸出	62.0	33.3	40.7	21.9	83.4	44.8	186.1	100.0
輸入	6.9	2.8	16.1	6.6	222.6	90.6	245.6	100.0
収支	55.1		24.6		-139.2		-59.5	

（出所）米国農務省輸出入統計より作成。

2017年の米国からメキシコに輸出される食料輸出の33.3%（62億ドル）を占めた穀物が、最大の出超を計上した（表3）。メキシコから輸入された穀物は6.9億ドルで、同国における穀物輸入依存度の高さを反映している。米国の同年におけるメキシコ向け穀物輸出の内訳によれば小麦8.5億ドル、トウモロコシ26.5億ドル、米2.8億ドル、大豆15.9億ドルである。これら穀物4品目の合計額は53.7億ドルで、穀物合計の86.6%を占めた。

表3 2017年米国の対メキシコ食料貿易収支（単位：億ドル）

部門	収支
穀物	55.1
中間財	24.6
消費財	-139.2
合計	-59.5

（出所）表2の輸出入データより計算

この入超傾向を、メキシコの状況に置き換えると、同国の対米食料貿易は出超を計上したことになる。

この貿易構造を農作物と中間財、加工食品の 3 部門別に見ると、以下のような特徴を示している（表 2）（なお、表 2 の統計や、前記の食料貿易にかかわるデータでは、総額に占めるシェアが比較的小さい林産物と水産物のデータは除外されている）。同表によれば、米国の収支は 59.5 億ドルの入超であるが、その部門別内訳は農作物と中間財で出超（55.1 億ドルと 24.6 億ドル）を計上する一方、消費財で入超（139.2 億ドル）を計上した。米国は農作物や中間財の 2 部門では、メキシコを凌駕する供給力を保持している。加工食品を含む消費財については、メキシコが米国より低い賃金水準を生かした製造業の競争力の強みを反映している。

米国・メキシコ間の食料貿易収支は、2014 年から 2017 年にかけて 4 年連続して、米国の入超を記録した。両国の食料貿易の各部門における特徴的な傾向を、2017 年のデータ（出所は表 2 と同じ）から紹介する。

米国が最大の出超を計上している農作物部門の輸出総額（62 億ドル）の上位 2 品目はトウモロコシ（26.5 億ドル）と大豆（15.9 億ドル）である。これら 2 品目合計（42.4 億ドル）で農作物総額の 68.4%を占めた。一方、米国がメキシコから輸入した農作物部門の上位 2 品目はビート・サトウキビ（3.6 億ドル）とコーヒー豆（1.8 億ドル）である。

中間財部門も、農作物の生産力の違いを反映して、米国の輸出が輸入を上回っている。例えば同部門の主要な輸出品として、大豆を原料とする大豆ミール（5.8 億ドル）や大豆油（2 億ドル）があげられる。

消費材部門では米国からは、酪農製品や各種加工食品等が輸出されている。メキシコから米国向けの主要な消費財としては野菜や果物・同加工品が主要品目である。

2017 年における米国の対メキシコ食料貿易の前年からの増加状況には、次のような特色が見られる。輸出は 78 億ドル増加したが、部門別内訳（表 2 参照）では農作物が 48 億ドル増加した。これは輸出の全増加額の 61.5%を占めた。次いで、消費財の増加額（29 億ドル）が 37.2%を占め、中間財の増加額（0.1 億ドル）シェアは 1.3%にすぎない。米国の農作物輸出増加は、メキシコが生産量が国内需要に追いついていない実態を反映している。消費材については、メキシコ製では消費者の嗜好にこたえられない米国製品への需要が根強いことが反映している。

## 2. 米国におけるメキシコ産野菜と果物

米国では、輸入野菜・果物市場で、輸入品が増加している。野菜については米国農務省の統計によれば、同国内の供給量に占める輸入比率が上昇した（表 4）。

同表によれば、米国内の生鮮野菜と冷凍野菜の供給量に占める輸入品のシェアは、2000年の10%台から、2017年には30%台に上昇した。生鮮野菜の中でも同シェアが高い品目としては、きゅうりやトマトの例があげられる。

表 4 米国における野菜市場における輸入のシェア（単位：％）

	2000年	2010年	2017年
生鮮野菜	13.3	24.4	31.6
冷凍野菜	19.9	33.7	38.7
缶詰野菜	8.3	13.6	15.7
生鮮きゅうり	38.0	60.7	78.5
生鮮トマト	27.9	50.9	58.1

（注）輸入シェアは国内供給量に対する輸入量の比率

（出所）米国農務省, *Vegetables and pulses Outlook, 2018* の各品目の需要・供給量統計より、作成。なお、小数点第1位の数字は出所の小数点第2位を四捨五入。

米国の野菜・果物市場では、メキシコ産のシェアが、高くなっている（表 5）。同表の生鮮野菜・果物の総輸入額に占める対メキシコ輸入額のシェアは、50%以上である。これに関して、個別品目輸入の重量（単位は億ポンド）による供給国のシェアによれば、多くの品目でメキシコが首位を占めている（表 6）。同表の7品目の中で、キャベツはカナダのシェアが首位（57.7%）を占め、これに次いでメキシコが42.0%のシェアを占めた。同表に計上されていないトマトも、輸入への依存度が高くなっている。米国農務省によれば、2017年にトマト輸入総額21.77億ドルの84.6%（18.42億ドル）が、メキシコからの輸入である。その輸入総数量178万トンの91.1%（162.1万トン）がメキシコで占められた。

メキシコから輸入された野菜と果物の数量が上位3品目の構成比率（2016年米国農務省による）は次のようになっている。野菜の上位3品目の構成比率はトマト29%、きゅうり12%、唐辛子10%であった。一方、果物のそれはアボカド22%、スイカ18%、ライム15%であった。両者の上位3品目で、共に全輸入数量の50%台を占めている。

表5 米国の野菜・果物の輸入額構成～総額と対メキシコ～ (単位：億ドル、%)

	A.輸入総額		B.対メキシコ輸入額		メキシコのシェア	
	2016年	2017年	2016年	2017年	2016年	2017年
生鮮野菜	93.8	104.4	49.4	59.6	52.7	57.1
生鮮果物	80.7	80.0	56.0	54.7	69.4	68.4
果物・野菜加工品	79.6	80.9	15.3	15.5	19.2	19.2
果物・野菜ジュース	18.6	20.1	3.3	4.8	17.7	23.9
合計	272.7	285.4	124.0	134.6	45.5	47.2

(出所) 米国農務省統計より作成

表6 米国におけるメキシコ生鮮野菜・果物の輸入状況 (2017年) (単位：億ポンド、%)

	総輸入量	対メキシコ輸入量	メキシコのシェア
ブロッコリー	4.86	4.73	97.4
アスパラガス	5.02	3.24	64.7
キャベツ	1.69	0.71	42.0
きゅうり	19.43	15.49	79.7
アボカド	19.85	17.08	86.0
すいか	1.62	0.91	56.0
ライム	12.4	12.14	97.9

(注) シェアは総輸入量に対する対メキシコ輸入量の比率

(出所) 米国農務省輸入統計より作成

米国では輸入の増加傾向が顕著な作物の生産が減少して、消費増加に輸入が対応している作物が目立つ。その具体例として、表6で総輸入量が上位2品目であるアボカドときゅうりで紹介する(表7と8)。

アボカドは1981年から2015年に国内生産量は34%減少したが、消費量は4.7倍(368%)増加した。この消費拡大に応えるべく輸入が増大した。その結果、輸入量が国内生産量を超えるようになった。結果、貿易収支(国内生産量－輸入量)が2015年にマイナスを計上した(表7)。つまり、国内供給量の不足分(189.4万トン)が輸入によって補われたことになる。アボカドはメキシコ産輸入量が、米国内生産量を凌駕するに至った、典型的な例である。2005年から、米国のアボカド供給については輸入が国内生産を超える傾向が続いている。

アボカドは、メキシコの伝統的な作物であり、米国市場への進出経緯について、The New York Time Magaine (2018年4月1日号)は次のように紹介している：

「アボカドはメキシコで、9000年前から栽培されてきた。米国は1914年、メキシコ産アボカドの輸入禁止措置を採った。その理由はアボカドに付着している害虫の侵入を防ぐためであり、加えて安価なメキシコ産が、米国内の同業生産者の競争力を奪うことが想定されたからである」。

同誌は1994年1月1日、NAFTA（北米自由貿易協定）が発効して、米国はアボカド輸入を自由化した。この時期に米国における1人当たりのアボカド年間消費量は1ポンド（約454グラム）であったと報じている。

その後、米国における同消費量は、米国農務省データによれば増加の一途をたどり、1990年-92年の期間では5ポンドから2014-16年には、8ポンドに増加した。同誌は米国におけるアボカド消費拡大には、同国内のヒスパニック・コミュニティの拡大やハリウッド・スターが健康効果を喧伝した効果を指摘している。

**表7 米国におけるアボカドの供給構造（単位：1,000トン、%）**

	生産量	消費量	輸入比率	貿易収支量
A) 1981年	52.8	47.9	0%	4.9
B) 2015年	34.7	224	85%	-1,894
AからBへの変化率	-34%	368%	8.5	-194.3

（出所）The Coalition for a Prosperous America, "US Fruit & Vegetable Imports Skyrocket After Trade Agreements June 07, 2017 より抜粋

1970年代以降、きゅうりの生産量は緩慢な伸び方であったが、1999年に過去最高値（118.3万トン）を記録した（表8）。同年以降は生産量は減少を続け、2015年には67.3万トンに43%減少した。この期間に消費量は187.9万トンから、241.7万トンに増加したことを反映して、輸入が増加している。

**表8 米国におけるきゅうりの供給構造（単位：1,000トン、%）**

	生産量	消費量	輸入比率	貿易収支量
A) 1999年	118.3	187.9	40%	-69.7
B) 2015年	67.3	241.7	74%	-1,744
AからBへの変化率	-43%	29%	3.4	-104.7

（出所）表6参照

### 3. メキシコにおける米国製加工食品の市場支配の実態

メキシコの輸入食品市場では、米国商品が高いシェアを占めている。これらの商品は表 1 の中間財と消費財である。輸入食品別の輸入量による供給国シェアのデータによれば、米国がトップ・シェアを占める品目が多い（表 9）。これらの中で、ワインについては、米国のシェアは 5.4%に過ぎない。そのトップはチリの 31%で、次いでスペインが 30%を占めた。

メキシコの貿易は米国が最大のパートナーであることから、消費者が米国商品になじんでいる。また、観光産業がメキシコの重要産業ある。観光産業を支える飲食業やホテルでは、世界市場で需要が多い米国の加工食品や食材への需要が旺盛なことが、米国の高いシェアを支えている。

表 9 メキシコ輸入食品の米国産品のシェア（単位：％）（2016 年）

商品	総輸入量	米国品のシェア
酪農製品	5.64 億 Kg	73
生鮮果物	5.75 億 Kg	86
生鮮野菜	5.18 億 Kg	85
牛肉	1.20 億 Kg	82.9
鶏肉	9.39 億 Kg	91.1
スナック食品	0.813 億 Kg	75
ビール	2.53 億リットル	96
ワイン	0.68 億リットル	5.4

（注）牛肉以外は純輸入量及び純輸入量のシェア

（出所）米国農務省,Mexico's Food Service Hotel,Restaurant and Institutional Report for CY2016,Gain Report Number:MX7307 Date: 1/9/2018

メキシコの食品産業分野では、ベーカリー製品の市場規模が注目される。同国のベーカリー製品の年間小売販売額は、2012 年の 154.88 億ドルから、2016 年 176.39 億ドルに増加した。この期間における年平均成長率は 3.3%である。2016 年の小売販売額は、世界第 8 位の規模である。中南米地域では首位ブラジル（306.97 億ドル）に次いでいる。メキシコの 2016 年同販売額の種類構成比率はパン 80.1%、ビスケット・スナック菓子 16.4%、シリアル 3.5%である。

ベーカリー製品の輸入市場でも、米国が総輸入額の約 69%を占め、次いでカナダが約 12.6%で、NAFTA 加盟国で約 8 割の輸入シェアを確保している（以上のベーカリー製品の

報告は、表 10 の出所資料より引用)。

表 10 メキシコにおけるベーカリー製品輸入 (単位：100 万ドル、%)

総額・供給国	2012 年	2016 年	年平均伸び率	2016 年シェア
総額	299.00	336.18	2.97	100.00
米国	218.04	230.58	1.41	68.59
カナダ	7.13	42.25	56.00	12.57

(注) 当該出所のベーカリー製品は、HS 分類番号 1904 と 1905 に該当。

(出所) カナダ政府 (Agriculture and Agri-Food Canada) ,Sector Trend Analysis-Bakery Products In Mexico, March 2018

#### 4. メキシコにおける穀物の輸入依存状況

メキシコの食料農産物貿易で、穀物部門が最大の輸入超過を計上している。穀物の国内自給力不足を反映して、慢性的な輸入超過傾向が続いている。本稿では、その対象作物として、小麦と米、トウモロコシ、大豆を取り上げる。

メキシコで穀物の消費量に占める輸入量の比率を見ると、小麦や米、大豆については、輸入への依存度が高い現状が表れている(表 11)。同表でトウモロコシのそれは 20%から 30%台と、他の 3 作物に比べて低い。しかし、その輸入量ははずば抜けて多い(表 12)。

表 11 メキシコにおける穀物の輸入依存度 (単位：%)

(国内消費量に対する輸入量の比率)

	2006 年	2011 年	2016 年
小麦	54.8	61.3	66.7
トウモロコシ	25.9	35.5	34.9
米	70.6	84.7	79.1
大豆	97.9	94.2	89.5

(出所) メキシコ大統領教書統計集 2017 年版 571 頁。

但し大豆は 578 頁の国内消費量と輸入量の数値より計算。

表 12 メキシコ穀物の対米輸入比率 (2016 年) (単位 : 100 万トン、%)

	総輸入量	対米輸入量	対米輸入比率
小麦	4.65	2.76	59.4
トウモロコシ	14.20	13.79	97.1
米	0.93	0.83	89.2
大豆	4.04	3.63	89.5

(注) 対米輸入比率は、総輸入量に占める対米輸入量の割合。

(出所) 総輸入量はメキシコ大統領教書統計集 2017 年版より引用。

対米輸入量は米国農務省メキシコ向け輸出統計より引用。

表 12 (2016 年) からはこれらの輸入量に占めるトウモロコシの割合が高い傾向が、うかがえる。これら 4 作物の総輸入量は 2,382 万トンの 59.6%が、トウモロコシ (1,429 万トン) である。これらの米国からの輸入量合計 (2,101 万トン) の内、トウモロコシ (1,379 万トン) が 65.6%を占めた。トウモロコシの総輸入量の 97.1%が対米輸入で占められた。メキシコにとって、米国が最も重要な穀物供給国としての地位を、長年にわたって維持している。

将来のメキシコにおけるこれら 4 作物の需給動向も、OECD(経済協力開発機構)と FAO(国連食糧農業機構)の共同調査による分析によれば、2027 年までは、従来の傾向が続くことを予測している (表 13)。

同表によれば、どの作物も国内生産量だけでは、消費量の全てを賄うことができない状況である。従って、今後も輸入に依存することになる。食料需要を押し上げる人口も、増加傾向を維持している。メキシコの人口 (2017 年) は 1 億 2,500 万人で、2016 年の増加率は 1.2%で、同じ NAFTA(北米自由貿易協定)締結国である米国とカナダの 0.7%を上回った。2018 年—2017 年における年平均人口増加率も米国 0.7%、カナダ 0.6%に対して、メキシコは 1.0%と予測されている (人口に関するデータは米国農務省が 2018 年 2 月に発表した "USDA Agricultural Projections to 2017"、20 頁より引用)。

表 13 メキシコの穀物需給構造の推移

		単位	年平均			年平均成長率	
			2015-17	2022年	2027年	2008-17	2018-27
小麦	生産	千トン	3,664	3,793	3,979	-1.29	1.24
	消費	千トン	7,018	7,654	8,104	1.31	1.19
	一人当たり消費	kg	48.5	49.4	50.1	2.69	0.31
	輸出	千トン	1,224	1,194	1,109	4.20	-1.27
	輸入	千トン	4,645	5,044	5,222	5.52	0.58
トウモロコシ	生産	千トン	26,222	26,739	27,566	2.44	0.72
	消費	千トン	36,629	40,920	43,332	2.85	1.08
	一人当たり消費	kg	130.8	131.9	133.5	-0.29	0.21
	輸出	千トン	1,166	8	925	34.11	2.64
	輸入	千トン	12,974	15,083	16,717	7.14	2.59
米	生産	千トン	164	151	145	0.90	-0.70
	消費	千トン	828	1,005	1,101	-1.96	1.97
	一人当たり消費	kg	6.5	7.3	7.7	-3.34	0.90
	輸出	千トン	29	84	84	2.94	0.00
	輸入	千トン	710	941	1,044	-2.39	2.21
大豆	生産	千トン	399	491	529	14.34	1.50
	消費	千トン	4,223	4,882	5,221	2.05	1.31
	輸出	千トン	0	0	0	-65.96	---
	輸入	千トン	3,993	4,392	4,692	1.83	1.39

(注) 大豆の一人当たり消費は計上されていない。

(出所) OECD-FAO, Mexico Commodity Projections 2018 より抜粋

## 5. メキシコのトウモロコシ事情

世界の3大穀物である小麦、米、トウモロコシの消費傾向を見ると、メキシコではトウモロコシの消費が最も多い。これは、メキシコではトウモロコシの粉を原料とするトルティリヤが、主食的な地位を維持してきことが影響している。トルティリヤは、薄い円形のせんべい状で、この両面をかるく焼いて、これに肉や野菜などを包んだ料理を、タコス(単数形 taco の複数形が tacos) と称している。

トルティリヤがメキシコの伝統食品として定着することに、貢献した事情としては紀元前 2000 年頃に乾燥トウモロコシの粒を煮立てる際に、灰を加えてアルカリ処理をすること

が行われるようになった。これは石灰水を加えることによって、トウモロコシの粒を粉に加工する段階で、硬い表皮を容易に取り除けるようになった。第 2 点は石灰を使用するアルカリ処理が、トウモロコシ摂食から生じる栄養障害を防ぐ効果を生んだことである。トウモロコシに含まれるナイアシン（ビタミン B3）は吸収されにくいですが、アルカリ処理をすると吸収されやすくなる効果が生まれる。トウモロコシを主食にするとナイアシン不足による病気（例えば皮膚病であるペラグラ）の発症可能性がある。メキシコでは、トウモロコシ加工段階で、石灰によるアルカリ処理によって、このような症状を防いでいる。トルティリヤがメキシコで、紀元前からの主食の地位を維持してきた背景には、伝統文化に根差した生活の知恵が生かされている。

ここまでは、メキシコのトウモロコシについて、品種別の需給実態を考慮していない。次に同国の消費動向について、品種別の動向を紹介する。

メキシコの農業関係の統計では、トウモロコシの粒の色によって、黄色粒トウモロコシ（以下、黄粒コーン）と白色粒トウモロコシ（以下、白粒コーン）に分類している。これら 2 種類のトウモロコシ需給構造には、違いがある。2016 年における需給構造の統計（表 14-17 の 4 表）からは、以下のような違いが見られる。

生産量は白粒コーン（2,456 万トン）が、黄粒コーン（355 万トン）に比べて約 7 倍の生産量である。消費量は白粒コーンが黄粒コーンを上回っている。輸入量は白粒コーンが少ない上に、輸出量も白粒コーンが黄粒コーンより多い（表 15、表 16）。輸入については、両品種とも米国への依存度が高い（表 14）。

**表 14 トウモロコシの需給 2016 年（単位：100 万トン、%）**

	黄粒コーン	白粒コーン
生産量	3.55	24.56
消費量	14.84	23.67
輸入量	12.95	1.066
対米輸入量	12.75	1.066
同上シェア	98.5	100

（注）対米輸入量は輸入量の内訳

（出所）メキシコ農畜産農村開発水産食料省（SAGARPA）、全国農業計画 2017 年-2030 年

表 15 黄粒コーン消費量の内訳 2016年 (単位:1,000トン、%)

	飼料	デンプン原料	食材	自家消費	消耗	輸出	播種用種子
消費量	11,206	2,650	348	324	268	35	12
構成比率	75.5	17.9	2.3	2.2	1.8	0.2	0.1

(出所) SAGARPA, 全国農業計画 2017年-2030年

表 16 白粒コーン消費量の内訳 2016年 (単位:1,000トン、%)

	食材	飼料	自家消費	輸出	減耗	播種用種子
消費量	12,399	4,440	4,266	1,499	904	170
構成比率	52.4	18.8	18.0	6.3	3.8	0.7

(出所) SAGARPA, 全国農業計画 2017年-2030年

トウモロコシの2大消費部門である飼料と食材については、次のような傾向が特徴的である(表17)。飼料向けコーン消費量1,565万トンの71.6%(1,121万トン)が黄粒コーンで、残り28.4%(444万トン)が白粒コーンである。

表 17 メキシコ:飼料・食材向けトウモロコシ消費量(2016年)(単位:100万トン、%)

	黄粒コーン	白粒コーン	合計
全消費量	14.84	23.67	38.51
同上構成比率	38.5	61.5	100.0
飼料向け消費量	11.21	4.44	15.65
同上構成比率	71.6	28.4	100.0
食材向け消費量	0.35	12.40	12.75
同上構成比率	2.7	97.3	100.0

(注) 消費量は表15と表16より計算。飼料・食材向け消費量は、全消費量の内訳量。

(出所) 表15と表16より作成。

一方、食材向けコーンの消費量(1,275万トン)の内訳では、白粒コーンが1,240万トン(97.3%)を占め、黄粒コーンは35万トン(2.7%)にすぎない。

このようにトウモロコシの全消費量(3,851万トン)の40.6%が飼料に、そして33.1%が食材に利用されている。食材については、依然としてトルティリヤが、メキシコ人の食生活で重要な地位を占めている現状を、反映している。1人当たりのトルティリヤ年間消費量

は 196.4Kg で、1 世帯当たりの食費（食料・飲料・たばこ支出）負担額の 20.9%がトルティリヤ消費額である（メキシコ農業計画 2017-2030、70 頁）。

今後のトウモロコシ需要見通しについては、白粒トウモロコシの消費減少傾向が、予想されている（表 18）。同表によれば白粒コーンの生産量は 2016 年 2,456 万トンに対して、2030 年には 74.3%増加して、4,282 万トンと予想されている。同期間にその消費量は 2,368 万トンから 2,286 万トンに、3.5%減少する。同期間における白粒コーンの年平均消費量減少率は、0.25%である。しかし、その生産量は年平均 4.05%の増加が予想される。

表 18 トウモロコシ生産・消費見通し（単位：100 万トン）

	黄粒コーン		白粒コーン	
	生産量	消費量	生産量	消費量
2016 年	3.56	14.84	24.56	23.68
2018 年	3.75	15.83	27.17	23.53
2024 年	4.34	19.19	34.99	23.13
2030 年	4.92	23.28	42.82	22.86

（出所）SAGARPA, 全国農業計画 2017 年-2030 年、p.70 統計より抜粋

白粒コーンの消費停滞は、トルティリヤの消費が停滞傾向であることが影響している。トルティリヤがメキシコの伝統食であることには変わりがないとはいえ、食材の多様化が伝統食の地位を低下させている傾向は否めない。

一方、食肉需要の増大により、家畜の飼育数の増加が飼料需要を押し上げている。飼料需要の担い手が、黄粒コーンである。これの 2016 年から 2030 年の期間における生産量の年平均伸び率 2.35%に対して、消費量のそれは 3.27%と予測され、輸入に依存する傾向が続く結果をもたらすことになる。2030 年における黄粒コーンの消費量は、2,328 万トンで生産量（492 万トン）の 4.7 倍に上る（表 18）。

白粒コーンの消費量の伸び率は、2016 年ー2030 年期にはマイナスが予測され、食材としてのトウモロコシ消費が、低迷する傾向が一層顕著になっている（表 19）。

表 19 トウモロコシ生産量。消費量の年平均伸び率（単位：％）

	黄粒コーン		白粒コーン	
	生産量	消費量	生産量	消費量
2003年-2016年	14.22	7.17	9.13	8.52
2016年-2030年	2.35	3.27	4.05	-0.25

（出所）表 18 参照

## 6. 飼料の主役は黄粒コーン

国内の食肉消費の増加を反映して、家畜の飼育数が増加傾向をたどり飼料の需要が拡大している。飼料作物の国内生産量だけでは、需要を充足できないことから、飼料原料（作物や中間材）の輸入が増加している。これを、2014年から2016年における輸入統計によれば、黄粒コーンが最大の輸入実績を計上した（表 20）。同表の2016年における飼料原料輸入1,310.6万トンの70.6%が、黄粒コーン（925.1万トン）で占められた。2016年の飼料原料輸入総量は、前年（1,080.6万トン）より230万トン増加した。同増加量の67.2%（154.5万トン）が黄粒コーンの増加量である。

表 20 飼料原料の輸入量（単位：1,000 トン）

	黄粒コーン	ソルガム	大豆ミール	蒸留穀物粕	合計
2014年	6,814	5.6	1,450	1,268	9,588
2015年	7,706	12	1,575	1,405	10,806
2016年	9,251	57	1,650	1,635	13,106

（統計情報源） Consejo Nacional de Fabricantes de Alimentos Balanceados y de la Nutricion,A.C.

（出所） 米国農務省,GAIN Report MX8010 Mexico Grain and Feed Annual,March 7,2018

表 21 用途別飼料生産量（単位：1,000 トン、%）

	a) 2016 年	b) 2017 年	伸び率	b) 構成比
食鳥用	16,152	16,545	2.4	51.8
養豚	5,024	5,230	4.1	16.4
肉牛用	3,571	3,659	2.5	11.5
酪農用	5,107	5,212	2.1	16.3
水産養殖	285	293	2.8	0.9
ペットフード	93.0	1005	8.1	3.1
合計	31,069	31,944	2.8	100.0

（注）伸び率は 2017 年の対前年比（b/a ×100）、構成比は 2017 年。

統計情報源と出所は表 20 参照

メキシコ国内の飼料生産量（2017 年）は、3,194.4 万トンで、前年比 2.8%増加した。2017 年の用途別飼料生産は、食鳥向けが全生産量の 51.8%を占めた（表 21）。食鳥向けの飼料需要が旺盛な傾向は、この消費が多いことから裏付けられている（表 22）。同表によれば、食肉 3 部門の中で、食鳥（主に鶏肉）の生産量や消費量が最も多い結果が示されている。

ちなみにメキシコ国内における食鳥部門における生産コスト構成比率のデータによれば、鶏卵分野で 63.4%、ブロイラー分野で 65%を占めている（現地関係機関のデータを引用した米国農務省発行の”Mexico Poultry and Products Annual”, Sep.20,2017 GAIN Report Number:MX70341 による）。

表 22 食肉の生産・消費動向（2016 年）

	牛肉	豚肉	食鳥
生産	1,878,705	1,376,199	3,094,633
消費	1,883,803	2,181,688	3,705,880
個人消費	15.4	17.8	30.3

（注）生産と消費の単位：トン。個人消費：1 人当たりの消費量で単位は Kg。

食鳥はニワトリと七面鳥を含む。

（出所）メキシコ大統領教書統計集 2017 年版 582 頁

## 7. 食肉消費増加に不可欠な輸入

メキシコにおける食肉消費量に占める輸入比率は、牛肉と食鳥が 10%台であるのに対して、豚肉が 40%台の比率で国内供給力の低さが目立つ（表 23）。食肉部門で共通の特色としては、米国に対する依存度が高いことがあげられる。次に、これら食肉 3 分野の対米関係について、主に米国農務省の貿易統計と関連報告から紹介する。

表 23 食肉消費量の輸入依存度推移（単位：％）

	2005 年	2010 年	2015 年	2016 年
牛肉	15.4	13.7	11.8	10.2
豚肉	36.1	43.1	40.3	41.7
食鳥	12.2	15.8	16.5	16.5

（注）国内消費量に対する輸入量の比率

（出所）メキシコ大統領教書統計集 2017 年版 571 頁

### a) 牛肉と生体牛の輸出が好調

メキシコの 2017 年における生産量（192.5 万トン）は、前年に比べて 2.4%伸びた。輸出（28 万トン）は 2016 年（25.8 万トン）に対して、8.5%増を記録した（表 24）。

2017 年の牛肉輸出量の 89%が、米国向けであった。2018 年の輸出量予測（30.5 万トン）も、前年比 8.9%と好調な伸びを見込んでいる。牛肉の国内消費の伸びを反映して、輸入も伸びている、米国農務省の予測によれば、その輸入量は 2018 年の 21 万トンから 2027 年には 37 万トンに達して、同期間の年平均輸入増加率は 6.5%と予測している。輸入量の 79%（2017 年）は、米国が占めた。次いでカナダが 10%を占めた。これら、2 か国に次いで、ニカラグアのシェアが 8%（2015 年 5%、2016 年 6%）を占めた。

メキシコでは、イスラム教徒が多い中東やアジアへの食肉輸出拡大を目指して、ハラール認証企業を増やそうとしている。2017 年に初めて、ハラール認証企業による牛肉（25 トン）が、カタールに輸出された（同年 4 月 27 日、メキシコ政府発表）。

また、ハラール認証を受けた食肉は、世界各地のイスラム教徒向けの輸出も期待されている。

メキシコにおけるハラール認証企業（2018 年 7 月 15 日政府発表）は、61 社である。主な業種は食肉（牛肉や食鳥）関連や、食品加工業である。

表 24 メキシコ：牛肉需給量（単位：1,000 トン）

	2016 年	2017 年	2018 年
生産	1,879	1,925	1,960
輸入	188	196	205
総供給	2,067	2,121	2,165
輸出	258	280	305
国内消費	1,809	1,841	1,860

（注）2018 年は予測

（出所）米国農務省,GAIN Report Number:MX8011,March9,2018,p.8 より作成

メキシコ・米国牛肉産業は、牛の牧畜部門で連携関係が確立されている。米国農務省データによれば、2017 年にメキシコが輸入した生体牛の 97%が、米国牛である（残りはカナダ 2.6%、ベリーズ 0.4%）。

同省の 2017 年貿易統計によれば、米国の生体牛輸入総頭数は 180 万 6,135 頭で、その内訳はメキシコ牛が 64.4%（116 万 3,641 頭）、カナダ牛 35.6%（64 万 2,494 頭）となっている。一方、同輸出総頭数 19 万 3,041 頭で、その内訳でカナダ向けが 75.3%（14 万 5,347 頭）の最大シェアを占め、次いでメキシコが 15.4%（2 万 9,719 頭）を占めた。

米国の生体牛貿易は、入超傾向を続けている。メキシコの生体牛貿易についても、出超傾向を維持していることも、このような米国の入超傾向の裏返しの傾向を示している（表 25）。

表 25 メキシコ：生体牛の輸出入（単位：1,000 頭）

	2016 年	2017 年	2018 年
輸出	1,130	1,203	1,250
輸入	31	32	37

（注）表 24 参照

（出所）表 24 出所の p.4 より作成

メキシコが米国の生体牛の重要な供給源となっている背景には、肉牛の飼育方法が影響している。生まれた牛は、肥育される前の段階である素牛（もとうし）の飼育方法には、放牧肥育（グラスフェッド）と穀物肥育（グレインフェッド）がある。メキシコでも食肉企業

の垂直統合が進んだことが、穀物肥育への転換を進めることになった。輸出される牛は肥育素牛で、主に米国南部でフィードロット（放牧せずに飼育するために柵で囲った多頭数集団肥育場）で、と畜のために飼育する。フィードロットで飼育する目的は、栄養価が高い濃厚飼料を素牛に与えて、短期間に太らせることである。

メキシコと米の牛肉産業部門では、メキシコが肥育素牛を輸出して、米国のフィードロットで肥育する国際分業が成立している。メキシコの生体牛輸出には、不安定要因も指摘されている。先ずメキシコ国内の牛肉消費増加に、応えるために生体牛を輸出よりも国内でのと畜が優先されることも想定される。また、肉牛飼育に必要なトウモロコシ等の輸入依存度が高いことが、生産コストを引き上げることが懸念される。米国と同様に高温化気候が、放牧肥育の牧草不足も懸念される。牛肉の品質を高める観点からは、穀物肥育の普及が考えられる。飼料穀物の安定的な供給体制の構築が求められる。

#### b) 旺盛な豚肉消費

メキシコでは牛肉よりも価格が安い豚肉の消費が好調である。この消費を支えるべく、輸入も好調である。2017年の国内消費量（218万トン）は前年より89万トン増加した（表26）。この増加量の内訳は、国内生産増加量が62.9%（56万トン）、純輸入量増加分（輸入量から輸出量を差し引いた量）が37.1%（33万トン）である。

表 26 豚肉の需給量（単位：1,000 トン）

	2016年	2017年	2018年
生産	1,211	1,267	1,305
輸入	1,021	1,083	1,200
総供給	2,232	2,350	2,505
輸出	141	170	180
国内消費	2,091	2,180	2,325

（注）2018年は予測

（出所）米国農務省, Livestock and Poultry: World Markets and Trade より作成

メキシコは中国と並んで、世界の二大豚肉輸入国である。米国農務省の長期予測によれば、2016年から2026年の期間における世界の主な輸入国の年間豚肉輸入量は、中国が1位、

メキシコが 2 位である。翌 2027 年予測ではこれが逆転して、メキシコ 1 位（176.5 万トン）、中国（174.6 万トン）となっている。この豚肉輸出入量長期予測でも、メキシコについては輸入量が輸出量を、上回る傾向が続いている（表 27）。同表の 2027 年予測値に関して、2018 年に対する増加率でも輸入量が 47.1%で、輸出量の 29.4%よりも高い結果を示している。

**表 27 メキシコ：豚肉の輸出入量長期予測（単位：1,000 トン）**

	2018 年	2023 年	2027 年
輸入	1,200	1,536	1,765
輸出	170	197	220

（出所）米国農務省、USDA Agricultural Projections to 2027

2017 年にメキシコの豚肉輸入量（108.3 万トン）の世界合計量（788.4 万トン）に占める割合は、13.7%を占めたが、2027 年には世界の総輸入量（884.6 万トン）に対して、メキシコ（176.5 万トン）のシェアは約 20%に高まると予測されている。

豚肉のメキシコへの有力な供給国は米国である。2017 年の輸入量は米国から 89%、カナダが 11%の構成となっている。米国産豚肉の主な品目は、モモ肉とバラエティミート（内臓）である。米国食肉連合によれば、メキシコは米国産豚肉輸出の約 25%を占める。2017 年のメキシコ向け輸出は 15.1 億ドルに上った。

生体豚の輸入頭数は 2016 年 2 万頭、2017 年 4.2 万頭で、その供給国の比率は米国 65%、カナダ 34%で、これら北米 2 か国が優位を保持している。豚肉の対米輸出について明るい材料は、2018 年 1 月 16 日付け米国官報が、メキシコを「豚コレラの清浄国」と認定したことである。この認定によって、メキシコから豚肉輸出が可能な州が 9 州に限られていた措置が、同国全土で輸出が可能になった。

### c) 高付加価値化が求められ鶏肉産業

メキシコで鶏肉は、低・中所得階層で牛肉より低廉な食肉として消費されている。また、外食産業界では、鶏肉商品としてはナゲットや手羽肉の需要が多い。国内消費を充足するためには、輸入も不可欠である（表 28）。輸入に依存する背景には、国内消費量を充足する必要性に加えて、高付加価値商品を輸入に依存していることを、米国農務省報告では指摘して

いる。例えば、鶏肉加工企業が deboned meat（枝肉になった鶏肉をカットして骨を取り除いた後も、骨が残っているがこれを骨肉分離機で処理された鶏肉）を、米国からの輸入に頼っている。しかし、米国からのブロイラー輸入シェアには低下傾向がみられ、これに対してブラジル品の輸入が増加傾向を示している。米国のシェアは 2015 年 94%、2016 年 90%、2017 年 86%低下している。逆にブラジルは同期間に 4%、7%、12%に上昇した（両国のシェアは各年 11 月における米国農務省のデータ）。

表 28 メキシコ：鶏肉の需給量（単位：1,000 トン）

	2016 年	2017 年	2018 年
生産	3,275	3,400	3,500
輸入	791	810	825
総供給	4,066	4,210	4,325
輸出	5	6	6
国内消費	4,061	4,204	4,319

（注）2018 年は予測

（出所）米国農務省、Mexico Poultry and Products Semi-annual GAIN Report Number:MX8007 Feb.19,2018

## 8. 食料資源の供給源を拡大するメキシコ

メキシコ政府は対米輸入依存度が高い食料資源（穀物、飼料作物や食肉）を、第 3 国から輸入を拡大する政策を、展開している。この政策は、米国でトランプ政権が発足後、注目度が高まっている。米国はメキシコにとって最も重要な貿易パートナーである。

トランプ大統領が強硬にメキシコとカナダに迫っている NAFTA（北米自由貿易協定）のルール見直しについて、農産物や食肉、酪農品も対象になることも想定されている。メキシコでは、米国が NAFTA の輸入税免除規定によって、これらの分野において高い市場占有率を維持している。メキシコ政府は、米国以外の各国からの輸入を拡大することを、NAFTA 見直し交渉の外交カードに利用するのではという見方もでている。

しかし、メキシコ政府は NAFTA 見直しが議論される前から、米国以外の各国との貿易拡大に取り組んでいる。このような政策によって、安定的な供給源の確保や少数の供給源による寡占による価格の高値傾向の抑止効果を狙っている。

農産物の供給源を分散することによって、対米輸入偏重を是正する近年の具体例として、ガイアナからの米輸入とアルゼンチン小麦輸入、ブラジル農産物輸入を、次に紹介する。

#### a) ガイアナ米を初めて輸入

メキシコ政府は 2017 年 3 月 1 日付け官報で、米（粳米、精米等のコメ）の無税輸入枠 15 万トンについての関税割当（TRQ）を公示した。これの適用期限は同年 12 月 31 日であった。同割当て申請者 1 人当たりの輸入限度量は、1 万トンである。さらに、2018 年と 2019 年の各年に 15 万トンの TRQ 実施を官報に公示した。

この TRQ によって、2017 年にガイアナが初めてメキシコに 11 万 3,525 トン（粳米）の輸出を実現した。翌 2018 年の 5 か月間で 6 万トンが輸出された。ガイアナの主要な米の輸出先は、隣国ベネズエラであった。しかし、ベネズエラが経済不振に陥ったために、ガイアナにとってこれに代わるメキシコ向け輸出拡大を期待している。2017 年のガイアナ粳米輸入量は、メキシコ国内市場で 12.7%のシェアを占めたと米国農務省は報告した。

他の南米諸国も、メキシコ向け米の輸出に関心を向けていると伝えられている。

メキシコにおける米市場は、粳米や精米のいずれも米国産が圧倒的な高いシェアを保持してきた。しかし、メキシコ政府が TRQ を活用して、各国に参入機会を供与する政策を活用するようになって、米国産米も一層厳しい競争に直面する時期を迎えている。

メキシコが米国に偏重している輸入の現状から、供給源分散の政策を展開するようになった状況に、南米の穀物・食肉輸出国であるアルゼンチンとブラジルも敏感に反応した。また、ウルグアイは米の輸出拡大を期待している。ウルグアイ米は、ペルーとイラクに次ぐ 3 番目の輸出先がメキシコである。ウルグアイ政府筋の情報によれば、2017 年 11 か月間のメキシコ向け精米輸出量は 7 万 4647 トンで、前年同期比 8.8%増加した（米国農務省 2018 年 1 月 18 日付 Gain Report Number:MX8002 より引用）。

#### b) アルゼンチン小麦を初めて輸入

メキシコではパンやベーカリー製品の消費拡大を反映して、小麦粉の需要が増加している。メキシコ政府は小麦の供給源についても、米国偏重を改めるべく 2017 年に、初めてアルゼンチン小麦の輸入を実現させた。

今回の輸入は、メキシコ企業 8 社による取引である。メキシコの製粉企業は 3 年前にアルゼンチン小麦の輸入許可を申請していたと報道されていた。メキシコの業界は更にドイツやポーランド、オーストラリアの小麦にも注目している。

アルゼンチン小麦も試験的な取引で今後、蛋白質の含有状況等の品質を確認して、今後の輸入を決定する方針である。

### c) 急増したブラジルからの輸入

2017 年におけるメキシコのアルゼンチンとブラジルの関係は、アルゼンチン小麦の輸入と並んで、ブラジルからの輸入増加も注目される。2017 年は、メキシコ政府・関係企業の使節団が両国を訪問して、農産物輸入拡大を協議するなど、南米側もメキシコ市場の確保への期待を高めている。

2017 年におけるメキシコの対ブラジル輸入で、最も注目されたことはトウモロコシの急増である（表 29）。同表によれば、2015 年から 2017 年の期間に、2015 年の輸入量は約 31.5 万トンから、2016 年はゼロとなり、そして 2017 年は 56.1 万トンに跳ね上がった。

メキシコはトウモロコシを南米から輸入する際は、アルゼンチン産とブラジル産の安い方を輸入している。2017 年はブラジルが豊作であったことが、メキシコへの輸出増加に寄与した。2018 年もアルゼンチンでは降雨量が不足して減産が予想されている。ブラジルでは、2017 年に引き続いて、順調な生産が見込まれるので、メキシコへの輸出も期待されている。大豆の輸入も 2017 年は前年よりほぼ倍増した。メキシコでは畜産部門の成長が大豆を含む飼料作物の需要を、確実に押し上げている。鶏肉については、ブラジルは世界有数の輸出国である。メキシコは逆に、輸入規模が大きいだけにブラジルの輸出拡大への期待は高い。

表 29 メキシコ：ブラジルからの輸入（単位：トン）

	2015 年	2016 年	2017 年
トウモロコシ	315,064	0	561,242
大豆	0	129,290	254,847
白米	50	125	0
冷凍鶏肉	25,895	58,800	94,345

（出所）白米は米国農務省 GAIN Report Number:BR1807、p16。他の 3 品目はブラジル政府輸出統計より抜粋して作成

## 9. メキシコの NAFTA 外交と食料貿易への影響

米国政府は 5 月 31 日、メキシコとカナダ、EU で生産された鉄鋼・アルミニウム製品への関税賦課に対抗する措置として、相殺関税の対象品目と適用税率を公示した。これに対してメキシコ政府は 6 月 5 日、対米報復関税とも言える相殺関税の対象品目と適用税率を公示した。同対象品目には、鉄鋼・アルミ製品と並んで農産物・加工食品も含まれている。

米国農務省が発表したメキシコ政府の対米食料関連報復関税の分析（6 月 6 日付、GAIN Report Number:MX8028）によれば、HS8 桁分類の対象 16 品目の輸入税は 15%か 20%,25%のいずれかが適用されることになっている。

一方、輸出については無税である。メキシコにおけるこれら 16 品目の輸入総額(2017 年)は約 31 億ドルである。これの 84%に相当する 26 億ドルが米国からの輸入で占められている（メキシコ税関による）。個々の対米輸入品目は、本稿で指摘したようにメキシコの輸入に占めるシェアが高い品目が多いことが、報復関税品目の輸入総額に占める米国産品比率が高い結果をもたらしている。

今回のメキシコ政府による措置で、影響が深刻な業種として、豚肉があげられる。米国食肉輸出連合会（USMEF）は 6 月 14 日、今後の影響を発表した。これによれば、メキシコの豚肉輸入量の 90%が米国産であり、その約 80%が今回の報復関税の対象品目となった。2017 年の場合、米国産豚肉輸出に占めるメキシコ向けシェアは、金額ベースで 23%,数量ベースで 3 分の 1 を占めた。今後、メキシコでは豚肉市場への新たな参入者との競争の結果、米国産のシェア低下も予想している。同連合会は 2018 年上半期で 90%を保持した米国産シェアが、下半期には 75%に低下することも予想している。

メキシコ政府は米国産豚肉の供給量低下による価格高騰を防ぐため 6 月 5 日、2018 年末までの無税輸入割当（TRQ）枠 35 万トンを決めた。この枠は自由貿易協定（FTA）を締結していないか、あるいは締結していても豚肉が対象品目でない国からの輸入にも適用される。メキシコは今回の事態に対応するためにも、TRQ を活用して新たな輸入供給源の確保を目指している。

メキシコの対米関係の懸案事項として、トランプ大統領が強硬に主張している NAFTA 再交渉の行方が注目される。これには農産物やその加工品との広範囲な食料貿易品目も、交渉対象になることが想定されている。

NAFTA 廃止による影響については、さまざまな予測が発表されている。しかし、廃止の

次に、どのような貿易ルールが設定されるのか不明であるだけに、明確な予測は困難であろう。NAFTA が廃止されれば、貿易が停滞することは想定されるが、具体的な輸出減少を確定することも難しい。その一例として、米国の Atlantic Council が米国、メキシコの輸出に関して、具体的な商品部門の NAFTA 廃止による減少率を発表した（表 30）。

**表 30 NAFTA 廃止による食品輸出減少率の予測（単位：％）**

	米国の対メキシコ	メキシコの対米
砂糖・同製品	49.1	22.2
飲料・たばこ	38.6	27.9
食肉獣製品	36.9	3.3
コーヒー・茶	36.6	5.0
酪農品	35.7	26.3
野菜・果物・植物	24.0	7.1
魚・同加工品	23.3	1.2
穀物・同調整品	16.5	4.5
油糧種子・油脂	14.1	11.0

（出所）Atlantic Council.What If NAFTA Ended? Oct.2017 P20 より抜粋

同表の両国の減少率を比較すると、米国の対メキシコ輸出の減少率の方が、メキシコの対米輸出に比べて高い結果が出ている。NAFTA を廃止すると、メキシコ国内の消費市場で高いシェアを占める米国商品の退潮傾向が否めないことを示している。

米国はメキシコに対して自動車産業に関する NAFTA ルールの不公平なことを強調するが、農産物や食品についての再交渉への見解が今のところは、伝わっているとは言い難い。表 30 の予測からは、現行の NAFTA 体制については、米国の農業・食品産業部門は再交渉には積極的に取り組もとしていない理由を暗示しているのではなかろうか。例えば、前記のように米国豚肉業界はメキシコの報復関税によって、同国で享受してきた高いマーケットシェアを失う事態に直面している。メキシコに対して、徒に一方的な強硬策をとると、大きいしっぺ返しを受けた事態を招いてしまった。

## おわりに

本稿のデータで示したように、メキシコと米国は相互に農産物や加工食品の供給を依存している。これも、NAFTA（北米自由貿易協定）が両国の貿易を拡大した効果である。

トランプ米国大統領が強硬に主張する NAFTA 再交渉が、両国の食料分野の順調な供給システムを維持できるのか、懸念されるという指摘もみられる。

両国が相互に依存する食料には、日常の食生活で消費される商品も多い。それだけに、これらの供給不安定が価格上昇や品不足を招けば、政治問題化を招くことも考えられる。

メキシコと米国の政府首脳が、NAFTA 再交渉で食料貿易に関わる問題に、どのように対処するのか注目される。